[原著論文]

ワールドカップ新潟開催における住民の意識変容
～開催後の意識の安定化までの時系列的研究～

西原康行、佐藤勝弘

キーワード：ワールドカップ、メガスポーツイベント、遺産、フィールドノーツ

Shift in the Consciousness of the Host Residents on World Cup in Niigata
A Study to Settle down the Consciousness of World Cup with Time

Yasuyuki Nishihara, M.P., M.P.E., Katsuhiro Sato, M.P.E.

Abstract

Most of the conventional sociology or management in sport science have studied only consciousness of the residents or marketing research in time of Mega-sport event. Therefore, it has not been studied from legacy's point of view after the Mega-sport event. This study tries to inspect the shift in the consciousness after the Mega-sport event to add in time. Results: 1) Behavior to watch Mega-sport event (=spectator) does not connect with behavior to play its sport directly. 2) Consciousness of participation to volunteer lives forever 3) Each participant and volunteer communicates after the Mega-sport event gently.

Key words: World Cup, mega-sport event, legacy, field notes

要旨

これまでのスポーツ科学の領域におけるメガスポーツイベント研究の多くは、イベントの開催中に着目した地域住民の意識調査や、マーケティング調査がほとんどである。したがって、イベントが開催された後に残された遺産といった視点からとらえた研究はほとんどなされていない。そこで、本研究では、開催地における地域住民の意識の変容を3年間、時系列的に検証した。結果として、1）観るスポーツと行うスポーツは直接的に結びつかないこと、2）ボランティアの意識は、開催終了後も残っていること、3）そのボランティアは緩やかな結びつきでつながっていること、の3つが明らかとなった。

I　はじめに

ワールドカップのようなメガスポーツイベントは「都市の活性化」いう記号により、政治や経済と密接に結びつきながら、巨大化してきた。佐伯[8]は、古代からの制度化されたスポーツの多様なメッセージが巨大なメディアとして仕掛けられてきたとして

西原康行　新潟医療福祉大学　医療技術部　健康栄養学科
佐藤勝弘　　同

［連絡先］〒950-3198　新潟市島見町1398番地
TEL・FAX：025-257-4434
E-mail：nisihara@nuhw.ac.jp

おり、一方、Joseph Maguire[3]は、スポーツを一般的な文化と切り離しながら、独自の文化的価値から世界における普遍的な社会システム論にまで言及し、「今日のスポーツは、メディアと結びつき、文化、情報、人、資源などと深く関わっており、スポーツの世界システムを形成している。」と述べている。メガスポーツイベントの隆盛は、1984年に開催されたロサンゼルスオリンピックであると一般的に言われている。オリンピック組織委員会委員長のピーター・ユベロスが、財源不足から衰退の一途をたどっていたオリンピックをメディアマーケティングによってビジネス化し、商品として売り出し、それまで赤字続きであったオリンピックの黒字化に成功した。オリンピックは、経済効果の極めて高い魅力的なイベントとして蘇ったのである。それ以降、20世紀後半の地球規模における経済発展を中心とした社会とあいまって、メガスポーツイベントのビジネス化が進行し、多くの巨大で豪華なスタジアムや各種競技場が整備された。

しかしながら、大会の開催前と開催中には、巨大な資本をもった企業や各種団体が招致都市に訪れ、瞬時に多くの利潤を獲得できるビジネスを展開するが、大会の終了とともに、跡形もなくその開催都市を立ち去るのである。残されたものは、地方の小さな都市における巨額の負債と、これらの負債を全て背負うことになる住民である。つまり、オリンピックやワールドカップといったメガスポーツイベントは、それまで数百年といった単位で、地道に築き上げてきたその小さな都市の文化や風土までも、瞬時に変えてしまうのである。

スポーツ科学の領域における研究の多くも、メガスポーツイベントの開催前、及び開催中だけに着目した地域住民の意識調査や、マーケティング調査といった瞬時の側面のみからとらえた研究がほとんどであり、そのイベントが開催された後に残された遺産といった視点からとらえた研究はほとんどなされていない。

そこで、本研究では、開催地における地域住民の意識の変容を時系列的に検証することにより、メガスポーツイベントによる地域スポーツ振興の有効性の一助を得ることを目的とする。

Ⅱ　研究方法

1　研究全体のステップ

1）ステップ1（プリテスト）

期間：2001年10月

適応行動モデルの調査票を一部改良し、プリテストを行い、質問項目の精度を高めた。プリテストの配布数は以下の通り。

配布数：174名（有効回答率：97.1%）

2）ステップ2（住民調査）

開催前調査として2002年2月、開催直後調査として2002年7月、開催1年後調査として2003年6月、そして開催2年後調査として2004年6月に、プリテストに基づき、地域住民の関心をアンケート調査した。

3）ステップ3（開催後の住民意識変容に関するフィールドワーク）

期間：2002年8月より2004年6月

開催直後からの、行政、商工会議所、地元企業、新潟県サッカー協会、ボランティア組織などの動向を観察する中で、開催後も引き続きワールドカップを生かした活動を行っているボランティア組織に傾斜配分した参与観察[註1)]を行い、フィールドノーツを記述した。

2　調査概要

1）調査方法

新潟市及び周辺町村における住民を対象

に「配布回収調査法」を実施。また、シカゴ学派[註1)]の生活者研究を参考にした参与観察を実施。

2）調査票による調査の抽出方法

ジェンダー、年代による「層別抽出法」を採用したが、年代については、一部においてサンプル数が少なかったため、スポットライトサンプリングを実施。

3）調査票のサンプル数

配布数：1,414名／有効回答数：1,038名／有効回答率：73.5%

4）参与観察対象

ボランティア組織「ウェルカム新潟」事務局長他14名

3　調査方法論

本研究では、適応行動モデルによる量的調査でとらえきれない生活者の微細な行動や意識について参与観察を複合的に取り入れた。

1）適応行動モデルによる調査

開催前、開催直後、開催1年後及び開催2年後の関心の変容について適応行動モデルを使い、明らかにした。具体的には、住民の関心度と、日常生活における重要度（以下「重要性」）、サービスや情報の取得容易性と質の高さ（以下「サービス」）、そのサービスの享受による満足度（以下「満足度」）の3つの要因の相関関係を把握した。

2）参与観察による調査

1）の量的調査で見過ごしてしまう生活者の微細な行動や意識について、その組織の一員として参加することにより、そこから見える人々の行動や発言に耳を傾け、記述する。特に、シカゴ学派の方法論を取り入れ観察を行ったが、参与観察におけるラポール、オーバーラポールについては、調査者自身の心的コントロールを第3者から観察及び指摘してもらうことにより克服した。また、参与観察の視点を生活者に置く際に最も注意した点として、「懸命に生きている『生活者の視点』」で観察し、調査者自らが「調査者」ではなく、「生活の『実践者』」として積極的に調査対象に係わることにより、調査対象者に「調査者」と思わせない関係を築いた。

Ⅲ　調査結果

1　適応行動モデルによる変容

1）観戦行動という側面

表1は、J1アルビレックス新潟（以下：アルビ新潟）、Jリーグ全体、海外リーグ、日本代表について、「テレビ視聴」「スタジアムでの観戦」「新聞、雑誌などの記事の購読」に対する関心を、開催前、開催直後、開催1年後及び開催2年後で調査した結果である。アルビ新潟は、スタジアムでの観戦行動に対する関心の高さと、その関心を規定する各項目（「重要性」、「サービス」「満足度」）が、開催前、開催直後、開催1年後及び開催2年後でほとんど変化がなく、高い相関を示している。一方、テレビ視聴への関心とそれを規定する各項目の相関は低いが、これは、アルビ新潟のテレビ中継が行われていないことが影響していると考えられる。さらに、新聞や雑誌の記事については、重要性とサービスは高いにもかかわらず、満足度が低い相関を示している。したがって、新聞や雑誌の記事内容の充実を図ることの必要性をうかがい知ることができる。なお、本調査の自由記述欄には、「単に試合結果を掲載する」「試合の経過を掲載する」だけではなく、得点したアスリートの背景にある練習の努力や、戦術分析といった精度の高い内容を読者が求めて

表１　観戦行動への関心を規定する要因の相関

			アルビ新潟			Jリーグ全体			海外リーグ			日本代表		
			TV	スタジアム	記事	TV	スタジアム	記事	TV	スタジアム	記事	TV	スタジアム	記事
			(N=272)	(N=272)	(N=272)	(N=157)	(N=157)	(N=157)	(N=114)	(N=114)	(N=114)	(N=483)	(N=483)	(N=483)
大会前		重相関	0.047	*** 0.451	*** 0.459	0.131	0.162	** 0.281	*** 0.398	0.126	*** 0.335	*** 0.391	0.163	*** 0.393
	重要度	単回帰	0.082	*** 0.483	*** 0.495	0.287	0.113	*** 0.289	*** 0.311	0.115	*** 0.486	*** 0.41	* 0.155	*** 0.415
		偏相関	0.071	*** 0.411	*** 0.405	0.256	0.101	** 0.263	** 0.283	0.101	*** 0.465	*** 0.399	0.149	*** 0.402
	パフォーマンス	単回帰	0.119	*** 0.326	** 0.254	0.109	* 0.192	** 0.241	*** 0.413	0.193	* 0.211	*** 0.401	0.142	*** 0.406
		偏相関	0.162	*** 0.319	* 0.218	0.102	* 0.177	* 0.214	*** 0.405	0.176	* 0.197	*** 0.386	0.137	*** 0.389
	満足度	単回帰	0.012	*** 0.337	* 0.213	0.081	* 0.212	** 0.292	*** 0.382	0.211	** 0.238	*** 0.389	** 0.295	*** 0.394
		偏相関	0.008	** 0.312	0.194	0.077	* 0.193	** 0.263	*** 0.356	0.197	* 0.221	*** 0.359	** 0.264	*** 0.362
大会直後		重相関	0.042	*** 0.421	*** 0.442	0.137	* 0.191	** 0.286	*** 0.403	0.154	*** 0.341	*** 0.584	** 0.221	*** 0.601
	重要度	単回帰	0.081	*** 0.473	*** 0.489	0.275	0.101	** 0.288	*** 0.307	0.111	*** 0.493	*** 0.592	** 0.312	*** 0.621
		偏相関	0.062	*** 0.398	*** 0.401	0.236	0.091	** 0.252	*** 0.294	0.097	*** 0.469	*** 0.569	** 0.298	*** 0.612
	パフォーマンス	単回帰	0.101	*** 0.314	** 0.243	0.112	* 0.223	** 0.243	*** 0.405	0.111	* 0.192	*** 0.551	* 0.159	*** 0.632
		偏相関	0.091	*** 0.299	* 0.219	0.105	* 0.191	* 0.215	*** 0.374	0.103	* 0.182	*** 0.539	0.138	*** 0.619
	満足度	単回帰	0.013	*** 0.321	0.112	0.092	** 0.237	** 0.297	*** 0.387	0.092	** 0.231	*** 0.573	** 0.222	*** 0.622
		偏相関	0.009	** 0.303	0.103	0.081	* 0.218	** 0.265	*** 0.366	0.015	* 0.219	*** 0.563	0.182	*** 0.619
大会1年後		重相関	0.055	*** 0.434	*** 0.439	0.112	0.148	* 0.217	*** 0.402	0.121	*** 0.353	*** 0.409	0.142	*** 0.301
	重要度	単回帰	0.073	*** 0.463	*** 0.451	0.251	0.101	** 0.274	*** 0.315	0.111	*** 0.498	*** 0.416	0.152	*** 0.328
		偏相関	0.054	*** 0.401	*** 0.411	0.236	0.091	** 0.269	*** 0.285	0.092	*** 0.471	*** 0.409	0.142	*** 0.301
	パフォーマンス	単回帰	0.097	*** 0.322	** 0.229	0.102	0.152	** 0.246	*** 0.411	* 0.189	** 0.221	*** 0.362	0.139	*** 0.311
		偏相関	0.088	*** 0.305	* 0.215	0.088	0.131	* 0.193	*** 0.401	0.173	* 0.204	*** 0.333	0.121	*** 0.298
	満足度	単回帰	0.153	*** 0.351	0.115	0.103	* 0.192	* 0.211	*** 0.381	* 0.212	** 0.235	** 0.301	** 0.283	** 0.254
		偏相関	0.123	*** 0.322	0.109	0.092	* 0.185	* 0.196	*** 0.353	* 0.199	** 0.221	*** 0.288	** 0.277	* 0.217
大会2年後		重相関	* 0.193	*** 0.446	*** 0.411	0.113	0.135	* 0.201	*** 0.419	0.123	*** 0.342	*** 0.412	0.139	*** 0.304
	重要度	単回帰	* 0.222	*** 0.453	*** 0.395	0.245	0.093	** 0.263	*** 0.321	0.103	*** 0.476	*** 0.412	0.147	*** 0.313
		偏相関	* 0.204	*** 0.428	*** 0.387	0.246	0.095	** 0.268	*** 0.274	0.099	*** 0.484	*** 0.421	0.142	*** 0.316
	パフォーマンス	単回帰	0.113	*** 0.326	** 0.233	0.105	0.143	** 0.237	*** 0.431	0.175	** 0.231	*** 0.353	0.132	*** 0.307
		偏相関	0.102	*** 0.308	* 0.229	0.094	0.113	* 0.182	*** 0.394	0.179	* 0.213	*** 0.357	0.131	*** 0.301
	満足度	単回帰	* 0.194	*** 0.341	* 0.222	0.112	0.185	** 0.264	*** 0.372	* 0.204	** 0.241	** 0.312	* 0.195	* 0.247
		偏相関	0.153	*** 0.328	* 0.201	0.102	0.149	** 0.247	*** 0.364	* 0.183	** 0.211	** 0.277	** 0.263	* 0.215

*: P<.05, **: P<.01, ***: P<.001

いるという意見が出された。

Ｊリーグ全般に関しては、新聞記事に高い関心を示しているが、その他のメディアに関する相関は低い。一方、海外リーグでは、TV、記事で高い相関を示している。日本代表の試合には、テレビ視聴、新聞や雑誌の記事で関心とそれを規定する各項目で高い相関を示しているが、スタジアムに関しては低い。これは、新潟において日本代表の試合があまり開催されていないことが影響していることが考察される。また、大会前と大会直後で重要度と満足度で有意な

表２　行う・子どもに託すことへの関心を規定する要因の相関

			自らプレー	子供信託
			(N=211)	(N=147)
大会前		重相関	0.152	* 0.192
	重要度	単回帰	0.133	* 0.214
		偏相関	0.129	* 0.201
	パフォーマンス	単回帰	0.162	0.152
		偏相関	0.157	0.135
	満足度	単回帰	0.178	0.172
		偏相関	0.175	0.162
大会直後		重相関	*** 0.419	*** 0.482
	重要度	単回帰	*** 0.619	*** 0.719
		偏相関	*** 0.601	*** 0.669
	パフォーマンス	単回帰	0.173	0.199
		偏相関	0.142	0.182
	満足度	単回帰	*** 0.542	*** 0.592
		偏相関	*** 0.519	*** 0.541
大会1年後		重相関	0.151	0.172
	重要度	単回帰	0.138	* 0.196
		偏相関	0.124	* 0.191
	パフォーマンス	単回帰	0.152	0.136
		偏相関	0.144	0.119
	満足度	単回帰	0.172	** 0.251
		偏相関	0.162	** 0.227
大会2年後		重相関	0.143	0.182
	重要度	単回帰	0.133	* 0.199
		偏相関	0.127	* 0.194
	パフォーマンス	単回帰	0.153	0.132
		偏相関	0.136	0.109
	満足度	単回帰	0.172	** 0.223
		偏相関	0.166	* 0.219

*: P<.05, **: P<.01, **: P<.001

表３　ボランティアへの関心を規定する要因の相関

			一般ボランティア		スポーツボランティア	
			イベント	日常	大規模	日常
			(N=126)	(N=126)	(N=126)	(N=126)
大会前		重相関	** 0.224	0.095	* 0.205	0.139
	重要度	単回帰	** 0.246	* 0.183	** 0.242	** 0.244
		偏相関	** 0.221	0.152	** 0.214	* 0.219
	パフォーマンス	単回帰	* 0.193	0.092	* 0.181	0.142
		偏相関	0.166	0.082	0.153	0.137
	満足度	単回帰	0.192	0.092	* 0.191	0.092
		偏相関	0.172	0.081	0.173	0.088
大会直後		重相関	*** 0.386	0.142	*** 0.493	0.152
	重要度	単回帰	*** 0.389	0.111	*** 0.499	** 0.231
		偏相関	*** 0.373	0.1	*** 0.475	* 0.204
	パフォーマンス	単回帰	*** 0.306	0.072	*** 0.45	0.143
		偏相関	*** 0.295	0.112	*** 0.431	0.132
	満足度	単回帰	*** 0.348	0.063	*** 0.488	0.121
		偏相関	*** 0.336	0.031	*** 0.469	0.108
大会1年後		重相関	*** 0.324	0.119	*** 0.489	0.114
	重要度	単回帰	*** 0.386	* 0.192	*** 0.492	* 0.182
		偏相関	*** 0.335	0.167	*** 0.475	0.175
	パフォーマンス	単回帰	** 0.231	0.093	*** 0.442	0.139
		偏相関	** 0.273	0.062	*** 0.433	0.121
	満足度	単回帰	* 0.221	0.089	*** 0.485	0.099
		偏相関	* 0.201	0.067	*** 0.461	0.092
大会2年後		重相関	** 0.293	0.143	*** 0.423	* 0.193
	重要度	単回帰	** 0.251	0.185	*** 0.411	* 0.223
		偏相関	*** 0.226	0.173	*** 0.395	* 0.219
	パフォーマンス	単回帰	* 0.214	0.093	*** 0.422	* 0.233
		偏相関	* 0.193	0.075	*** 0.418	0.218
	満足度	単回帰	* 0.195	0.073	*** 0.472	0.107
		偏相関	0.184	0.058	*** 0.426	0.102

*: P<.05, **: P<.01, **: P<.001

相関があるのは、開催前の新潟で行われたコンフェデレーションズカップや日本代表の試合を他のスタジアムで観戦した影響であると考えられる。

総じて、アルビ新潟やＪリーグ全般、海外リーグについては、ワールドカップ開催が１年後や２年後の関心に大きく影響したとはいえないということが考察される。

２）行う、子どもに託すという側面

表２は、自らプレイしたい、あるいは自らプレイはしないが子どもに託したい（習わせたい）という関心について表している。

この表から、開催直後は自ら行いたいという関心と子供に託したいといった関心とその規定項目の相関が高まったが、１年後、２年後には、再び開催前の関心に戻っている。ただし、子供に託したいといった関心では、重要性について、開催前、開催直後、開催１年後および開催２年後で有意な差に変化がないことから、子供にサッカーを行わせる事の重要性は定着していると考察される。また、満足度では、開催直後と開催１年後、２年後で相関があることから、W杯開催による効果と考えることができる。

３）ボランティアという側面

表３は、ワールドカップのような大規模スポーツイベントの一過性のボランティアと、日常のスポーツボランティア、さらに、一般のイベントボランティア（国際会議など）と日常的なボランティア（介護、福祉など）について、全て同じ対象者に調査した結果である。この表から、「メディアを通した観戦行動」や「自ら行いたいという意識」「子供に託す」といった項目との大きな違いとして、W杯開催直後と開催１年後及び２年後で相関が高く、特に１年後と２年後にボランティアの行動に関する関心が落ちていない点があげられる。つまり、ボランティアがもっともワールドカップによる関心に影響を及ぼし、それが維持され続けているといえる。ただし、日常のボランティアは、イベントのような一過性のボランティアの行動と結びつかないこともこの表からうかがえる。一方、ワールドカップといった大規模スポーツイベントのボランティアは、スポーツに限らず、一般のイベントボランティアにも関心を示していることが明らかになった。

２　ボランティアの意識（参与観察より。下線部は、考察データとなりうる語りの内容）

表４は、先の適応行動モデルによる調査を単純集計し、各項目の割合から、開催１年後の影響率を算出したものである。この結果から、ボランティアに関する意識は、開催１年後も住民の心の中で生き続けていることがうかがえる。本項では、このボランティアの意識について、量的調査では把握できない微細な意識を参与観察から描く。

１）縛りを嫌う自主的なボランティア

ワールドカップ新潟開催において、ウェルカム新潟！2002（住民が自主的に立ち上げたボランティア団体）の果たした役割は

表４　関心の割合変動と１年後の影響率

N=1038

主成分分析における抽出項目	開催前から（開催半年前）	開催によって（開催直後）	開催１年後	
			（開催１年後）	（影響率）
アルビレックス新潟への関心	24.3%	26.2%	25.0%	2.8%
Jリーグ全体への関心	13.8%	15.1%	14.3%	3.5%
海外リーグ（特に欧州）への関心	9.1%	11.0%	9.5%	5.3%
日本代表への関心	31.9%	46.5%	30.5%	－4.2%
一般ボランティアへの関心	6.5%	9.5%	7.8%	20.9%
スポーツボランティアへの関心	7.8%	12.1%	11.0%	40.7%
自らプレーしたいという意識	6.0%	20.3%	6.5%	8.1%
子どもに習わせたいという意識	3.4%	14.2%	3.6%	5.7%

※影響率：開催前を100%とした場合の開催１年後の上昇率

大きいといわれている。新潟市が開催後の活動の記録として編集した「2002　FIFAワールドカップ　ようこそ新潟へ」では、ウェルカム新潟！2002の企画した活動や記事、コメントが半数以上を占めている。主な活動は、「グラスルーツの交流イベントの企画、実施」「市外から来る人々への道案内」「“お勧めの食事処”が掲載されているワールドカップマップの作成と配布」「沿道の花壇造り」「ゴミ拾い」「新潟駅南口歩道（スタジアムへのアクセス通り）へのメモリアルプレートの埋め込み」などである。新潟市のワールドカップを担当した行政職員のN氏は次のように語った。「ウェルカム新潟のようなボランティアをわれわれ行政が作る予定だった。しかし、ボランティアを行政が組織すること自体、無理だということが徐々にわかってきた。市報で募集を呼びかけてもなかなか集まらない。集まった人たちに説明会をすると辞退する。助かりましたよ。ウェルカムみたいなボランティアが出てきてくれて。」一方、本ボランティアの事務局長のK氏は言う。「行政は『ボランティアをさせてやる』とか『市報に出しさえすれば、募集が殺到するだろう』といった認識しかなかった。だからそれが自然と態度にでてきて、市民は嫌気をさす。ボランティアをするってそういうことじゃないんですよ。それと、説明会で『こういうこととこういうことをして下さい。これをしてはいけません』なんて言われたら、みんなやらないよ。」新潟におけるワールドカップボランティアは、以上のような行政サイド、ボランティア団体の代表者の語りからもわかるように、権力的に縛られることを嫌う、自ら自主的に企画し、考えることを望むといった意識が極めて高いことがうかがえた。

2）緩やかな人と人との関係性（組織）

ボランティア団体の事務局長のK氏は、「僕もそうだけど、気楽な気持ちでみんな参加しようと思ってるのに、『これを必ずしてください』みたいなことをいわれたらみんな逃げちゃう。どっかに逃げ道を作っておいて、いつでもやめられるような雰囲気にしてあげなきゃ。住所録なんか作っちゃだめだよ」また、このボランティアの発起人であり執行部として中心的な活動をしていた10人の事務局はお互いにデータベースを作り、きちんとした住所管理をしているわけではなく、携帯電話に電話番号だけ登録していたり、手帳に電話番号だけ記述してある程度の関係である。どんな職業かといった程度のことはお互い理解しているが、どこに勤めていて、どこに住んでいるのかは把握していない。ワールドカップボランティアの発起人であり、執行部であるこの10人の関係すら、このように緩やかな関係を保ち続けているのである。この緩やかな関係が、ボランティアの人と人との関係性（組織）にとって、きわめて重要であることが明らかとなった。また、これは、ボランティア活動の機能を示したClary et al[2]の研究を継承し、さらに掘り下げた結果となった。

3）ボランティアを突き動かすもの

K氏を中心としたボランティア団体は、いつ、どんなきっかけで結成されたのか。それを明確に答えられる人は、10人の世話人といわれるボランティア団体のいずれの方もあいまいだとしている。ただし、K氏は漠然としてではあるが、おそらく1999年に新潟市が開催した市民への理解を得るために企画された「市民懇話会」に招かれ、説明を受けたときに「やろう」と決意したという。しかも、その決意は、市から頼まれたわけでもなく、市が「ボランティアを必要としている」といった提案があったわ

けでもないという。もともと、この10人は、自主的な街づくり研究会を開催したり、スポーツ以外の新潟における文化活動を支援する活動でよく顔をあわせる人々だという。事務局メンバーのS氏は「遊ぶ」という言葉をよく発する。「ボランティアは大人の遊びのようなもんですよ。ディズニーランドに行くようなわくわく感。お金を払ってディズニーランドに行かなくても、同じ遊びがワールドカップで体験できる。それもボランティアすることで。」ディズニーランドに行くようなわくわく感は、内心の価値への義務を裏付ける語りとして表現されている。つまり、権威などに内心を曲げてまで服従するという近代の現実社会からの解放[註2)]であり、子供がディズニーランドに行くことで学校や社会に服従することから逃れられる開放感に重なる。ただし、『大人の遊び』という表現は、ボランティアが個々人の様々な考え方、行動様式、あるいは個人の間には違いがあることを認めた上で、他者への関心を通して、異なる他者への許容的な態度の上に自ら遊ぶという、さらに、その許容的な態度自体も遊びとして楽しむ精神を浮かび上がらせることができる。ディズニーランドに行く子どもの遊び感覚と、ボランティアの「大人の遊び」の感覚は、この部分に違いがある。

４）ボランティアと報酬の関係性

ウェルカム新潟のボランティア団体の活動に参加すると、黄色のTシャツが貰える。そして、このTシャツがほしいが故にボランティアに参加したいという人々や、この活動で金銭的な報酬が得られると思って訪ねてくる若者も多かった。Tシャツ担当のAさんは、「よく言われました。『ボランティアのバイトしたいんですけど』でも、私たちはそんなお金ないし、でも、その気持ちはわからないでもないから断ったりしない。お金は出ないけどお金以外で得るものがあると思うから参加してって言いました。それと、なんかもらえますかって。一応Tシャツは提供しますが、そういう目的で参加する人はすぐにいなくなりますね。なかには、はまってく人もいるけど。」ボランティアを一元的に報酬を目的にしていない組織、あるいは、外的報酬を目当てにする人々を受け入れない組織といった視点で見ることはできない。外的報酬を目当てにする人々を受け入れる寛容さと、それらの人々も取り込んで、うまくマネジメント（動機付け）させる柔軟性がボランティアに内包されていることが考察される[註3)]。なお、報酬とボランティアの関係性は、Chelladurai[1)]の実益的動機の先行研究がなされているが、微細な関係性はこれまで明らかにされておらず、本研究のほかにも研究を積み重ねていく必要性がある。

５）非日常のボランティアと日常のボランティアそして１年後の再会

事務局のサブリーダー的な役割を行っているAさんは、ワールドカップボランティアに参加した人々の特徴を次のように語った。「私たちは、祭りで遊んじゃおうという発想です。ですから、普通の高齢者の介護をしたり、ゴミ拾いを行うことは、ちょっと」「空間の演出が大切だと思うんですよ。外国人がたくさんいて、お祭り的な街のにおいがする。その中で汗を流して、私たちが主役を演ずる。その中で汗をかいている自分ていいなって思うんですよね。」ワールドカップのボランティアは日常的なボランティアと必ずしも同じ概念で説明できない。Aさんのこの発言は、先のSさんの「ディズニーランドに行くようなものですよ」といった表現にシンクロナイズドする。つまり、非日常的な空間演出の中で、自分がその空間の主体として楽しむのである。

開催１年後の６月吉日、新潟駅南口で、ワールドカップ開催時にボランティアを行った人々がメモリアルプレートを埋め込んだ周辺地域のゴミ拾いを企画した。しかしながら、ボランティアに参加した人々の１割強（約100人弱）しか、このゴミ拾いには参加しなかった。参加者は、ボランティア当時、通訳、道案内、誘導、清掃、医務など、様々なボランティアを行ってきた人々であり、特に清掃に携わった人々が参加したわけではなかった。参加者の多くは、あの１年前の楽しかった「思い出」をこの機会に改めてかみ締めてみたかったという動機で参加したようである。そして、ワールドカップ開催時に清掃で参加していた人の一人であるＹさんは、「あの時とは明らかに違いますね。今日は盛り上がりに欠ける。当然ですけど。今日は、『１年前はこんなことしてたんだな』『楽しかったな』という回想の思いと、『街の掃除をしていいことしてるなって感じ』１年前はそんな義務感よりとにかく『楽しい』って感じだったから」

ワールドカップという特別な、非日常的な「時間」の流れと「空間」のにおいは、ボランティアを単純に一つの概念で括ってしまうことを拒む。人々の日常の生活空間の時間の流れと空間のにおいが、ワールドカップのような非日常性の空間の流れとにおいにシンクロナイズドしないことが本参与観察から明らかになった。さらに、大規模スポーツイベントのボランティアとその他の多くの大規模イベントのボランティア（たとえばコンサートや国際会議など）では、祝祭性、身体性（ワールドカップは腕をまくって汗を流して頑張る雰囲気）という観点から、動機に微妙な違いがありながらも、祝祭性とは違った非日常性（大きなイベントを担当している自分がすてき）という観点での共通点が見出された。たとえば、FIFA、全国資本のメディア（マスコミ）、全国規模のスポンサースタッフ（ＴＶでよく見る企業の人々）、海外の人々といった地方の人々が日々接点のないスタッフと同じ土俵で仕事をすることへの憧れと楽しさ、そして一方で新潟人として新潟の特色を紹介してやろうという「もてなしの心」がスパイラルした非日常性なのである。

６）開催後２年目のウェルカム新潟

2003年12月、ウェルカム新潟の発足メンバー６人が、「忘年会」と称して、１年後イベントの後初めて集合した。なぜ、大会後初めて再会するにもかかわらず「忘年会」なのか。それは事務局長の次の言説から伺える。「１年後イベントの後、みんなが集まることはないんですよ。あのイベントがいまいち盛り上がらなかったし、みんな仕事とかあるから。集まりたいとなんとなく思いつつ、言いだしっぺになるだけのエネルギーはない。今日も半年前からみんながそれぞれに『そろそろ集まろう』って言っていて、忘年会シーズンだからそれが後押しして集まるんですよ。」

久しぶりの再会が「忘年会」という形で新潟駅前の中華風居酒屋で開催され、久しぶりに会うにも関わらず、「久しぶり」の挨拶はない。メンバーはそれぞれの近況を知っており、会話も近況についてより詳しい内容を確認しあうように進む。彼らは、ＭＬ（メーリングリスト）に登録し、それぞれの活動を載せていることと、個々に電話連絡を取り合っているため、情報を共有しているようである。しかしながら、会話の内容は、「ワールドカップ」「ボランティア」「サッカー」「アルビレックス新潟」といったキーワードで括れる内容ではなく、家族の話、仕事の話、新潟市の合併の話、朱鷺メッセの話、古町（繁華街）の衰退の話であった。忘年会と称した会も終盤に差し掛かり、Ｗ氏（新潟市の商工会の役員）

が突然「ところで、このウェルカム新潟を今後どうするか、誰が音頭を取っていくか決めましょう。」と発言した。他のメンバーもこの会がそういった目的で開催されたことを暗黙に理解しつつ参加したわけだが、誰もその話には触れずにここまで来た。このウェルカム新潟を自然消滅させたくない、しかし組織を残していくことは難しいし、自分が負担になるのは嫌だという思いが、それぞれのメンバーに共通していた。W氏の考えは明確だ。それは事務局長の会終了後の発言からうかがえる。「Wさんはいつもそうなんですよ。自分の利になることばかり考える。今日だって、商工会議所や印刷屋のためになることばっかり。それでいて、自分では何もやらない。」

結局、W氏は事務局長に今後のウェルカム新潟のあり方を一任し、他のメンバーは特にそのことには触れず、会は終わった。そして、現在もＭＬは続いていて、１週間に１度くらい誰かが情報を載せている程度の関係が続いているが、再会したり、ボランティアを組織化する動きはない。

以上のことから、スポーツイベントのボランティアは、イベントの郷愁がかすかな結びつきとして残されつつも、日常性や生活空間とは結びつかない一過性の要素をもっていることが明らかとなった。

Ⅳ　結語

以上の結果を総合的に解釈することにより、大規模スポーツイベントとしてのワールドカップ開催によって生活者としての地元住民の意識や関心がどのように変容したのかということと、その結果に基づいた若干の提言を行う。

１　本研究の枠組みでは、ワールドカップ開催がJリーグや地元Ｊ１アルビレックス新潟の観戦行動に与えた影響は少ないといった結果になった。（Ｊ１アルビレックスは、ワールドカップに影響されない高い観戦行動が確立されているという表現が適切である。）しかしながら、海外リーグへの関心や、日本代表チームへの関心が高いことから（ＪリーグやＪ１が日本代表や海外リーグにアスリートを輩出しており、Ｊリーグあっての日本代表という理念）、本結果は別の枠組みでの調査が必要であるということが明らかとなった。

２　ワールドカップ開催によって、子どもにサッカーを行わせたいという意識に変容した人々は、開催１年後にその関心が低くなった。これらの人々は、サッカーを子どもに行わせることの意義や重要性は高いため、身近にスポーツに関われる環境を整備することにより、需要が高まる可能性が示唆される。

３　ワールドカップ開催１年後も生活者の関心が唯一消えない大規模スポーツイベントのボランティアについては、１）行政主導ではない自主的な活動を大切にする風土を作ることが必要　２）強制されない、緩やかな組織つくりが必要　３）日常のボランティアと違った非日常的な祝祭性がボランティアを駆り立てるが、そこには大人としてのルールが存在するといった結論が導き出された。

本研究は、「日常生活における生活者」の視点で、調査を進めてきた。つまり、ワールドカップが日々の日常生活において生活者にどのように残っているのかという視点であり、行政や企業の立場から調査を進めていない。したがって、ワールドカップによる経済効果、遺産としてのスタジアムのあり方といった華やかな研究ではないため、多くの政策提言ができるような結果は出なかった。しかしながら、開催半年前、開催直後、開催１年後及び開催２年後の住民の意識や関心の変容を探ることは、ワールドカップ開催を評価し、新たな政策を打ち出

していく上で重要であると考えた。

今後の課題として、「日常生活における生活者」の視点といいつつ、フィールドワークからまだ見えていない部分がかなりある。例えば、ワールドカップ開催により、異文化交流が盛んになった。それも行政が企画する「大きな交流」ではなく、日常の生活の中での交流（新潟で出会った海外の人とインターネットでメール交換している人や、韓国語を習い始めた人など）である。これらの人々と深く触れ合うことから、見えてくるワールドカップの遺産について今後引き続き調査を進めていく必要がある。

文献

1）Chelladurai P.: Human Resource Management in Sport and Recreation. Human Kinetics. 1999.
2）Clary E.G. et al:Understanding and Assessing the Motivations of Volunteers a Functional Approach, Journal of Personality and Social Psychology, 74(6): pp1516-1530, 1998.
3）Joseph Maguire :Identities Societies Civilization, Global Sport, Polity Press: pp10-12, 1991.
4）鎌田慧：自動車絶望工場．講談社文庫．pp191-220, 1983.
5）M･ウェーバー：プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神．岩波書店．p75, 1989.
6）Michael Buraway: Manufacturing Consent, University of Chicago Press: pp15-34, 1979.
7）西原康行：現代社会におけるスポーツ用品産業に関する研究，新潟大学教育人間科学部紀要，第4巻第2号：pp419-430, 2001.
8）佐伯聰夫：現代社会とスポーツイベント，体育の科学，日本体育学会編：pp356-357, 1996.
9）田尾雅夫：ボランティアを支える思想．アルヒーフ．pp88-90, 2001.

註

註1）西原[7]による「現代社会におけるスポーツ用品産業に関する研究」において約半年間、工場の実際の製造現場で働いて、工場の人々と生活した経験を描いたフィールドワーク（エスノグラフ）に基づく。また、この研究はMichael Buraway[6]や鎌田[4]の経営や組織を産業研究の側面からとらえた方法論に依拠する。

註2）M・ウェーバー[5]の「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に依拠した考察。

註3）田尾[9]は、外的報酬への期待を含め、「純粋な利他主義があるかどうかという極端な議論はしないまでも（中略）それを過大にも過小にも考えない方がよいのではないか。」と述べており、本考察もこれに基づいている。

※本研究は、平成14年度日本体育学会プロジェクト研究助成によって一部行われている。